【七段】

61 ありがたい事に（こうして故人の事蹟を訪ねていると）、旧いなじみの友人が貧しい中から自分の食事を分けて 私に食べさせてくれる（ような気持ちになるし）、

62 親族の者達が私の汚れた衣服をつかんで洗ってくれているような心持になるのである。

63 これらの故人の生き様を知るにつけそれによって私の生きる苦悩を慰められているのである。

64 だから、何故早く死なぬのかと呪うほどのこともない。

65 （たとえ貧しくて乏しい）食事を日々に口にする事ができるのは、天地自然また、万物を創造化育するその神々のお恵みによるもの。

66 周りの人たちが（私のことを）憶測で何を取りざたしようが、自然の成り行きに任せるほかはない。

67 悲しくて苦しい毎日を嘆いている間に温陽な春をやり過ごしていた。

68 私の暗い心をよそに、穏やかに晴れた初夏、日の光に明るく新緑も映えて世の中も治まっていて、おだやかな日々。

69 この土地の風俗、風習には当然ながら次第になじむようにしたいし、

70 それぞれの習慣にもしきたりのままに従いたいと思っている。

【八段】

71 （ところが、この太宰の地といったら京との余りの違いに驚くばかりで、例えば）この土地の塩が苦味強いのは、ただ木か炭で海水を炊くだけの塩だからだ。（京辺りの藻塩は風味があった）。

72 （一方周りには）あくどい取引で手に入れた布を、高く売りつけて儲けている商人たちが（うようよ）いる。